

## シンポジウム「アートで医療が変わる」

鈴木賢一 奥村伸二

田中太平 藤井尚子

### はじめに

先端的な医療の提供は、患者に大きな恩恵をもたらす一方で、その空間は無機質になりがちで、心身の弱った患者のみならず、緊張の強いられる医療従事者にとってもストレスフルな環境となっている。こうした医療や福祉の現場にアートを取り入れ、患者の不安を和らげ治療に活かし、医療スタッフの職場環境の向上に寄与する事例が、昨今増えつつある。本シンポジウムは、国内外の事例をとおして、今後の医療現場におけるアートの役割について考えることを目的に実施した。

開催日：2017（平成29）年3月11日（土）

開催場所：名古屋市立大学医学部研究棟 11 階 講義室 A

活動形式：講演および意見交換

参加人数：約 100 名

登壇者（五十音順）：

奥村伸二（社会医療法人同仁会耳原総合病院病院長）

鈴木賢一（名古屋市立大学芸術工学研究科教授）

田中太平（名古屋第二赤十字病院第一新生児科部長）

藤井尚子（名古屋市立大学芸術工学研究科准教授）

司会：岡庭純子（名古屋市立大学芸術工学研究科研究員）

以下、それぞれの講演内容については、講演者が執筆した発表要旨から抄出している。なお、当日の発表順に従い報告する。



### 1. 講演 「英国における医療とアート」（鈴木賢一）



図-1 講演（鈴木賢一教授）

鈴木賢一教授は、各地の教育施設や医療施設など多くの公共施設の建築計画に携わられている。本講演は、国外における医療施設とアートの関わりおよびその動向について、「英国における医療とアート」と題して、1) 欧州ヘルスケアデザイン会議2016の話題、2) イギリスの病院のアート活動と実態、3) イギリスに学ぶアートマネジメントについて話題を提供した。

2016年6月ロンドンにて開催された「欧州ヘルスケアデザイン会議」における2日間18セッションで扱われたテーマは、ヘルスケアの概念から、制度設計、病院デザインまで幅広い。ヘルスケアについてHumanising（人間的に）あるいはPeople-centered Approach（人間中心の方法）、人と環境に関してTherapeutic environment（健康維持の環境）、Environmental health（環境医学）といったキーワードなどを中心に議論された。

その後、ロンドンの3つの病院Great Ormond Street Hospital For Children、Chelsea And Westminster Hospital、Royal London Hospitalのアートについて紹介

した。医療空間から療養空間、院内のパブリックな空間まで、幅広くアートが浸透している。子ども病院における動物やキャラクターを用いたアートのみでなく、成人を対象とする空間では美術館以上の質を目標とするアート展示がなされている。また、教会やヒーリングスペースなど、祈りや内省のできる空間も用意されており、環境そのものが療養の役割を果たしている。

このようにイギリスにおける医療の現場には様々なアートが取り込まれて活用されている。それを可能にしているのは慈善団体の存在であり、病院とアートまたはアーティストをつなぐ役割を果たしている。そこには医療とアートを関連づけマネジメントできる人材があり、多くの資金を調達する仕組みができあがっている。

これらを通じて、日本において医療におけるアートの浸透を促すために、1) 小児医療以外にも対象を拡大する、2) ビジュアルアートのみでなく、パフォーマンスアート、デジタルアートなど手法を拡大する、3) 資金調達、マネジメント能力のある人材育成など体制の充実が必要であることを説明した。その上で、医療と療養の環境デザインにおけるデザインやアートが果たす役割について、人間性の回復についても言及があった。

## 2. 講演「新生児治療室の明かりと光」(田中太平)



図-2 講演 (田中太平先生)

二人目の登壇者、名古屋第二赤病院新生児科部長である田中太平先生は、名古屋第二赤病院前 NICU (neonatal

intensive care unit) の改築に伴う種々の課題に対し、「光」を用いた医療現場の環境デザインへの取り組みについて講演された。

名古屋第二赤十字病院 NICU はもともとスペースに余裕を持った設計となっていたため、2008 年に 25 床から 30 床に、2013 年の改築では NICU と GCU (growing care unit) を完全に分離して 35 床まで増床することとなった。同じ面積で 40% 増床となるため圧迫感が生じると予想され、狭くなっても広いと錯覚させるためにはどうすればよいか、医療スタッフにとって働きやすく、癒やしを感じられるような環境を作るためにはどうすればよいか、赤ちゃんや面会に来られるご家族にとって快適な空間を提供するためにはどうすればよいか検討した。

改築にあたって構造上天井に段差が生じるが、その段差も利用しながら自動調光できる間接照明を取り入れ、「赤ちゃん達だけでなく面会に来られるご家族や働くスタッフにとっても優しい NICU」、赤ちゃんは暗く感じても、働くスタッフにとっては明るいと感じる「低照度・明印象環境」というコンセプトを立て、看取りの部屋を兼ねた多目的室には、「本物の空を見ることができずに最期を迎える赤ちゃん」のために人工空も設けることとした。

NICU の照度は日中/夜間 130lx/93lx、GCU は日中/夜間 363lx/241lx と日内サイクルをつけ、30 分かけてゆっくり調光することで、赤ちゃん達の交感神経を刺激しないように配慮した。この照度変化も考慮に入れて、日中でも夜間でも光に暖かみを感じられるよう色温度は 2,700K の暖色系とし、皮膚色の観察に適した高演色性の LED を特注した。また、使用された 3,000 個の LED はそれぞれ独立して調光できるため、重症度も配慮してベッド毎に照度を微調整した。さらに、光が織りなす影にも配慮し、反射光を減らして光をきれいに拡散させるため、へパフィルターも含めて塗装は全て「つや消し」とした。

低照度・明印象環境を客観的に評価するため、空間の明るさを数値化した Feu を測定した。直接照明の仮設 GCU

では照度 297 lx で Feu は 13.5 だったが、改築後の NICU では照度が 130 lx と半分になったにも関わらず、Feu は 15.4 と逆に明るく感じられるようになったことが立証された。スタッフに対するアンケート調査でも、皮膚色が識別しやすくなった、目が疲れにくくなった、疲労感が減った、働きやすくなったなど高評価を得た。

部屋全体の印象としては、ゆったりしたカーブを描く段差の中に間接照明が組み込まれて天井を照らしているため、柔らかい光が部屋中を満たし、空間に広がりや癒やしを感じられるようになったことや、明かりやデザインによって、人の心を明るく照らしてくれるといった心理的影響についても、NICU 改築の取り組みにおける多くの実証実験データを用いながら、わかりやすく説明がなされた。

### 3. 報告「名市大病院外来アトリウムのアート」(藤井尚子)

名古屋市立大学附属病院（以下、附属病院）外来病棟 1 階アトリウムにて、テキスタイル・アートによる作品を制作・展示した。制作にかかる動機やプロセスなど、制作者側の視点から医療現場にアートが出現することの意義について報告を行った。

本展示は、平成 28 年度本学理事長裁量経費課題「附属病院内を活用した作品展示プロジェクト」として実施したものである。展示会場とした附属病院は、高度先進医療を提供する名古屋都市圏の中核医療機関であり、外来病棟はその玄関口ともいえ、患者や家族、医療スタッフなど多くの人々が往来する公共空間である。そのため、これらの種々の条件を勘案し、且つ環境デザインを考慮した上で、「病院のアート」とは何か、どのような意義があるかを、「人間のなかの自然」をキーワードに考察した。

病気とは、生体の生理状態が悪く変化することであり、治癒とは、生体の生理状態を良く変化させることである。病気と治癒のいずれも、生命活動の自然である。また、治療とは、人工のはたらきではあるが、生理状態をより良く変化させたいと願う、人間のなかの自然ともいえよう。こ

うした観点から、アート（人工物）は、人間のアプリアリな状態を励起させる触媒として、その存在意義があると考えた。例えば、「共感」は人間のなかの自然の一つである。しかし、他者の痛みを自己の痛みと感じる共感力は、著しい疲弊をもたらす場合がある。特に患者の家族の心理的疲弊は、身内ゆえに回避できないものである。入院中の付き添い家族が抱えるエンパシーの悪循環を一旦断ち切ることで、再び付き添う気力を満たすことができるのではないかと考えた。以上から、病院のアートには、望ましくない非常状態を可能な限り平常状態へ切り替えるスイッチとなることが求められるのではないかと考えた。

そこで、入院患者の家族の心理的負担の軽減に向け、非常から平常へシフトする作品を制作すべく、制作者の個人的経験から得られた気づきをもとにイメージを展開した。作品は、青色をグラデーションに染色したテキスタイルによるインスタレーションとした。嵐紋をした布をオパール加工し、布の一部を透過させ、アトリウムの天窓からの自然光を遮らないよう工夫している。その上で、展示空間の特性を生かし、作品を高所に設置し、視点を変えることで、心情の位相を変化させることをめざし、さらには、作品形状によるパースペクティブにより、広々とした空や海を感じさせ、患者には小さな勇気を、家族には少しの自由を与えうるものとなることをめざした。

報告では、こうした作品の制作過程を紹介するとともに、本講演終了後、展示会場へ移動し、作品紹介を実施した。



図-3 展示会場での作品紹介（藤井尚子）

4. 講演「病院運営とアート」(奥村伸二)



図-4 講演 (奥村伸二先生)

大阪府堺市の急性期病院である耳原総合病院は、2015 年新病棟建設を期に積極的にホスピタルアートを導入、多くの取材・見学者が訪れており、注目を集めている。ホスピタルアートが病院運営においてどのような役割を果たしているか、病院長・奥村伸二先生より講演いただいた。

1950 年、当時無医村だった地域住民のカンパより創立、それ以来、「無差別平等の医療の実現」を理念に掲げ差額ベッド料の徴収を行わず、現在 386 床を抱える耳原総合病院の入院件数は、同規模の病院の中で全国トップクラスである。すさまじい過密労働を強いられながらも、民間病院の 8 割は赤字経営といった現状は一般にはあまり知られていない。医療機器の発展により、数日間かかっていた診断・治療が、数分でわかるようになった。そのことが医療従事者の時間的余裕を生んだのかといえば、そうではない。とにかく慌ただしく、スタッフには、人生や将来についてなど、一見たわいも無い話をする時間も余裕も、病院運営の制度上も機能上もゆるされないのが実態である。

高度経済成長の裏打ちされた医療・医学の発展、国民皆保険制度にともない、日本は世界一の長寿国になった。しかし、ほんとうの「豊かさ」とは何であろうか。当時、医療界では生物学的に長生きさせることが究極目的で「死は敗北」以外の何物でもなかった。昨今、人間をもっと生物・心理・社会的モデルからとらえ、「疾患を治癒させること」と「より良い人生を生き抜くこと」と、どちらが大切な

かーという問題提起がされている。当院が「より良い人生」へどれだけコミットできるか…それは、多様性を受け入れる環境や文化、固定観念を打ち破れる風土が、何より重要だと考えている。

こうした背景をふまえ、ホスピタルアートを取り入れるようになった「きっかけ」は、2015 年完成した新病院建設の「鉄入れ」式のと、新人看護師の発した「先生、ホスピタルアートを入れてください」「もっと病院を好きになりたい」のひとことであった。「新病院建設」という大仕事を前に、職員を喚起させる起爆剤になればいいなという思いもあった。

どんな病院にするかー職員、医局はもとより地域にも声をかけ、何度もワークショップを行い、意見をだしあい、正式決定するまで 2 年間かけた。結果 NPO アーツ・プロジェクトに協力依頼をし、室野愛子アートディレクターを迎え、基礎となる「コンセプトづくり」をしっかりと構築し、以下、7つのプロジェクトを展開している。

[共同の壁 (タイル壁画)]

新病院の南側外壁を、病院の理念や歴史を表現するモチーフ (小鳥・しづく葉・ケヤキ) で装飾したタイル壁画である。地域と病院をつなぐと同時に、病院スタッフが誇りをもてる、外壁となっている。

[ふれあいエントランス (YUKO TAKADA KELLER「希望の芽」)]

正面玄関を入ったエントランスホールにある作品。19,000 枚のハート型のパーツを組み合わせ、大きな二葉の形となっている。病院創立の経緯を象徴するアートワークとなっている。

[内壁面レリーフ立体アート (虹色プロジェクト)]

モチーフの一つである鳥が、病棟 1 階から 14 階の各エレベーターホールに描かれている。それぞれの鳥には意味が付与されている。入院患者や付き添い家族、病院スタッフなど多くの人が制作に参加した。

[あんしんのアート (MRI、CT 室他)]

MRI や CT 検査の際の待ち時間に感じる不安を軽減さ



せるため、花や樹木をモチーフに壁面や床面を装飾し、「懐かしさ」や「落ち着く」といったくつろげる空間を作り出した。

[風の伝言 (入院室、ラウンジ他)]

「四国こどもとおとなの医療センター」(香川県) 院長の発案による、病室に本物の作品を飾る・若手造形作家に作品展示の機会を創出することを目的としたプロジェクトである。入院患者は、300 点の作品の中から好みの作品を選び、自らの病室に飾ることができる。

[風かおる空庭 (14F 緩和ケア病棟)]

最上階にある緩和ケア病棟にデッキスペースを設けることで、患者はベッドのまま出ることが可能となった。外出が困難な患者にとって、本当の空や緑とふれあう機会は、ケアの中でも重要な意味を持つ。

[色彩基本構想]

「虹」をテーマに 14 階までの各フロアを色彩計画によって色分けしている。色彩基本構想による視認性の向上だけでなく、病院内アートワーク全体に共通する「物語」の象徴ともなっている。

以上のプロジェクトを実施した成果として、ホスピタルアートを導入することで、職場やスタッフのコミュニケーションがより活性化され、これは、病院運営に資するものであると期待される。また創立以来の「理念の継承」を目に見えるかたちで具象化するのもアート(デザイン)の力によっている。

「まちのシンボル」として、戦後から変わらず、求められる存在であり続けたい。どんなまちにしたいか、どうしたら住み続けられるか — 「アートの力」でそんなことを考えたり、集ったりできる、そんな「まちづくり」の一端も担えればと考えている。

#### おわりに—成果と課題—



図-5 意見交換 (左から鈴木、田中、奥村、藤井)

シンポジウムの後、鈴木教授がファシリテーターとなり意見交換が行われた。そこでは、医療現場におけるアートやデザインの有意性について、医療者側からの積極的・肯定的な立ち位置からの言及が多く見られた。その背景には、医療の発展のために医療者側からの機能性や効率性が重視されてきたことで、ケアを受ける患者が置き去りにされてきただけでなく、医療者側にとってもそうした環境が自分たちに心理的にマイナスに作用し、ストレスになっていることに気づいていない、といった反省があったからである。医療者側がイニシアティブを持って、医療環境改善へ取り組むことで、結果的に働きやすい環境の創出に繋がっていくとする発信は、病院組織を統括するお二方ならではの説得力があった。また、環境改善にかかるコストに見合っただけの価値があるということを実証し、さらに、そのコンセプトの重要性を社会的に広く認知してもらうためには、一般の人達にも知ってもらう努力も重要と考える、といった、医療の質を担保する良い環境づくりのため試行錯誤する真摯な姿勢からも窺い知ることができた。

また、医療者側の考えるアートやデザインの意義について、病院運営や地域との連携・まちづくりといった巨視的視座を持った上で、現実的手法として捉えている点が印象的であった。こうした巨視的視座は、国外の先端的事例を維持するアートマネジメント団体を核とした病院とアートを連結するシステムにも共通するものであろう。

一方、アートやデザインに従事する者にとっては、「治療」の定義を病気に対するものだけでなく、さまざまな人々の抱える心的状況にまで及ぶものといった、より広義に捉えることで、病院をめぐる今後の環境デザインのあり方への問い直しも可能となろう。なかでも「札拝堂」や「語らうためのベンチ」などの設置は、国内の先進的医療を提供する医療現場には多く見られない。危機的状況から避難し守られる場が確保されていることは、社会的・文化的な違いに関わらず、心の平安を保つ上で重要なことである。これらの観点からも、アートの役割を繙くヒントとなるのではなかろうか。

新生児医療の専門医、総合病院の院長、アート作品の制作者、そして建築計画学を専門とする4人が「医療とアート」を巡ってプレゼンテーションを行った本講演会は、ひとつひとつの話は視点も内容も異なるにもかかわらず、アートという共通項が、何かこれまでの医療空間あるいはケアそのものに変革をもたらすのではないかという予感を得ることができた。アートという人間味あふれる要素が、患者にもスタッフにも、先端医療にも病院経営にも新しい風を吹き込んでくれるという期待をもつことができた。一見、共通項のない4名の底流に流れる通奏低音は、人間らしさの回復にある。不安や哀しみ、忙しさといった人が抱える負の局面に、さりげなく手を差し伸べるかのような環境のあり方にアートは深く関わっている。医療におけるアートの役割や意味について、関係者が広く共有するための機会としてきわめて有意義な集会であった。

終了後、実施したアンケート（自由表記）からも、医療者側からの医療環境デザインやホスピタルアートへの取り組みに大きな関心が集まっていた。より良い医療環境を形成していく上で、医療者側・制作側の緊密な連携はもとより、多くの人々の協力が必須となるため、こうした取り組みへの認知度を上げていくことも重要な課題であるだろう。

謝辞

本報告は、シンポジウム終了後、講演者に執筆いただいた発表要旨を、報告様式に合わせて一部修整し作成しました。

(藤井尚子)



図-6 シンポジウム・リーフレット

(デザイン担当：芸術工学部3年遠藤和穂・竹内怜子)